

歴史と文学

山崎 義 光

二〇二二年度冬季大会で成田龍一氏にご講演いただいた。ここではそれを受けての感想を記しておきたい。

講演は、一八六八年（戊辰）の六〇年後、一九二八年（戊辰）を前後する時期に幕末から明治維新时期への関心が高まったことに触れることから始められた。ソ連誕生、西欧の没落とアメリカの覇権強化が進む世界戦争の時代。国際関係の軋轢と緊張のなかで、マルクス主義、民俗学、歴史哲学といった異なる関心と方法論によって日本の近代史が捉え直された。この時期、五・一五事件（一九三二、昭和七）、二・二六事件（一九三六、昭和十一）など「昭和維新」を掲げた事件もおきた。島崎藤村『夜明け前』（一九二九―三五）や、これに刺激された林房雄

『青年』（一九三二―三四）なども現れた。「維新」の時代を語ることに、「維新」を掲げた事件が起きたことは同じ地平の出来事である。

当時の「現実」を理解するために維新期の歴史が参照項となった。「我々」の社会は「近代」化の進行のなかでどのような現在に至ったか、もしくは、現在から顧みるに「我々」の先行世代はどのように社会を形成してきたかということが、歴史学として、行為を促す指標として、小説によって、維新时期を参照して言語化された。「日本」という我々のコミュニティは、どのような過程を経て「近代」国家になったか、その時「国民」はどのような形成され生きたか、「国民」はどのような多層性をもっていったか、いかに「近代」「日本」を捉え直したらよいか。ナショナルヒストリーはそうした問いに下支えされている。

成田氏の講演を機に、あらためて「歴史」とは何だろうか、「歴史」と「文学」はどのような関係にあるだろうかを考えさせられた。できるかぎり平易に、かつまた、広義に歴史と文学の共通の地平を考えると、どういうことになるか。

歴史と文学が共通の基盤としていっているのは、いずれも、言語による表象行為として営まれていることである。講演の基礎にはそのような見方があったと思われる。

成田龍一『近現代日本史と歴史学』（中公新書、二〇一二）の「はじめに」で、氏はおよそ次のように述べている。「歴史」は、歴史をとらえる観点をもって書かれ語られる。そこには、語る者の関心にもとづいた取捨選択と意義づけが働く。「歴史

とは、ある解釈に基づいて出来事を選択し、さらにその出来事を意味づけて説明し、さらに叙述するもの」であり、それを「歴史像」と呼んでいる。事実肉迫して物語られる「歴史」には、不可分に「像」として捉える関心と認識の枠組み（理論）とが働いている。「歴史とは「現在と過去との対話である」」。したがって、ダイアログ（対話）に基づきダイナミック（動態的）に歴史像は変化する。物や資料の収集と事実検証にもとづきながらも、そこに解釈を加え意義づけて語られるのが「歴史」である。それゆえ、叙述された時代の関心や観点も「歴史」に投影される。

言い換えれば、「歴史」は過去をふり返りながら現在の地点で語られる物語だといえるだろう。もちろん、それは、「歴史」であることを担保する事実の検証（可能性）をふまえることで「事実」として物語られる。

そもそも「歴史」は、ある時点での現在からみて、ある地域の政治的文化的な共同体を枠づけて対象化することにかかわる。事実立脚するよりも、神話にこそ立脚し、その共同体のアイデンティティを表すものであることに歴史を語る意義があった。近代においても、明治の初めに皇紀が制定され、一九四〇年には皇紀二六〇〇年祭が賑々しく挙行された。事実は検証されうるが、神話は検証されえない。だからこそ、絶対性をもった起源たりうるのであったろう。

それに対して、近代歴史学は、物証や文献、声の取材などまで含めた事実検証に立脚する。歴史を追究しようとする者の関

心や観点と事実との対話によってこそ成り立つ。それゆえに捉え直されうる動態的なものである。動態的であるということは、不安定だということでもある。時に、共同体が危機に直面して硬直化した物語（プロパガンダ）が席卷し、そのために迷走することにもなるし、またそれが批判され考え直されることにもなる。

一九二八年前後の人々ほどのような関心と観点をもっていたか。世界戦争後の国際関係、世界資本主義の帰趨、そうした関心にマルクス主義が理論的観点を与え影響力をもった。他方で、名も無き庶民の暮らしのなかで営まれてきた生活の形から民話にいたるまでに関心を寄せ、近代国家形成以前にまで遡ろうとする民俗学があらわれた。あるいは、「人間」の「精神」という形而上の論理から世界史を捉える世界史の哲学も現れた。

現在の関心と理論的枠組みをぬきに「歴史」はなく、しかしそれゆえに、絶対的普遍的でもありえない。つねに現在と過去との動態的な対話のなかで、歴史は多角的に捉え直されうる。それによって、意味のあるモノ・コトとして語られる。近代歴史学の「歴史」もまた、理論的枠組によってモノ・コトに言（こと）分けされた「虚構」としての物語」という性質をもつ。この性質が成田氏のいう「像」ということの含意だろう。

歴史が人間の営み一般を対象にするのであれば、文学をめぐる営みも歴史の一部である。文学研究は、事実としての「文学」の営みを対象化し歴史化する、文化史の一部をなす。

他方、物語としての歴史は文学との共通性をもつ。理論と事

実の検証にもとづくかどうかの度合いに応じて「歴史」となり、事実から遠ざかった事の（言による）表象までを含んで「文学」となる。

一九二八年前後は、文学の社会性が強く意識された時代である。「文学」に広く多様な人々が親しく接する土壌ができたことによる（大衆化）。出版物・商品としての文学のニーズが高まった。社会運動に資する文学を志向したプロレタリア文学運動が隆盛した。関東大震災後に殊の外目に見えて変わりゆくモダン都市は、感性の変革を促す新たな世相として文学の題材となった。社会の関心や欲求に、どう応えるかということに「文学」は敏感に反応した。そして、単に迎合するのではなく批評的に応じるものもあった。一九三〇年代以後の戦争期には、検閲・取締がより厳しくなるとともに、挙国一致の要請に応えることを強いられた。

言葉による表象は、虚構であることによって「現実」に形を与える。一九二八年を前後する時代に「文学」と「歴史」が多元的な観点で維新期を対象化しようとしたことの土台には、国際関係の不安、大衆化への不安という、「我々」の「現実」への不安と関心の高まりがあったのだと改めて思い至った。